

展示・学習等WGにおける主な御意見

< 1. 展示・学習活動に関する御意見 >

(展示活動のターゲット)

- 新たな施設の立地からすると、常設展示では修学旅行で訪れる国会見学者を呼び込んで来館者を確保し、企画展示については、修学旅行生にも見てもらいたいが、別の層を狙っていくことも考えられる。
- 少子化により子どもは減っていくため、修学旅行生をメインターゲットに据えない方が良いのではないか。高齢者で知的好奇心の高い方が少人数グループで美術館や博物館を回るようなケースも増えているので、そのような方々にも来てもらえるよう、展示は広いターゲットで考えると良いと思う。
- 特に常設展については、外国人についてターゲットとしてどう考えるかが重要であり、例えば多言語対応などの取組が必要ではないかと考える。
- 来館者のうち、中心となるボリュームの多い層は小中高の修学旅行生にならざるを得ないと思うので、そうした客層にとって本当に来てよかったと思える記憶に残るような展示を用意できれば良いのではないか。

(多様なターゲットに訴求するための展示内容の工夫)

- 小中高生に向けて魅力的なものをつくるということと、文化的な活動が好きな人に向けて魅力的なものをつくるということ、これらをどう考えるかがカギになると思う。小学生向けのものをつくって喜ぶのは小学校低学年だけであり、中学生などはむしろ大人向けのものを見たがる。したがって、基本的には、一般の人が格好良い、素敵だ、美しいと思えるきちんとした空間、海外から来た人が見てもクールだと思えるような空間、という視点でつくってあげばよいのではないか。
- ターゲット層が子ども・若者からシニア層まで幅広い中で、それぞれが興味を持つ資料は多様。そうした中で、シンボル展示は、いろいろな人々にある程度響くようなものを揃えた方がよいと思う。憲法のような歴史的に重要な意味を持つものは同然必要であるが、シンボル展示もしくは常設展示として、そもそも公文書とは何か、その広がり共有できるような展示があるのではないか。各ターゲット層の人々が、どこかで「見て楽しかった」と感じられ、記憶に残るような仕掛けがあればよいと思う。
- どれくらいの量の、どれくらい古くからの資料があるのかといった、公文書館のボリュームや時間軸の全体像は、それ自体がサプライズである上、明確な物差しがあるので、誰にでもアクセスできるきっかけになり得る。「国立公文

書館とは」という展示では、シンボリックにそういったものを示し、「我々の国でこういった文書がずっと受け継がれてきて、今ここにあります。あなたと繋がっています。」といったようなメッセージを伝えるといいのではないかと。

- 見ている人にとっては、公文書の一番重要な価値は自分とのつながりだと思うので、展示によって文書と自分とのつながりを感じられるようにするというのは、非常に大事な視点だと思う。
- 国立公文書館とは何か、という展示の中には、保存することの大変さのようなものも盛り込んでどうか。そうすれば、訪れた人々が公文書の意義を感じ、例えば、今後きちんと文書を残していこう、という意識の醸成にもつながるのではないかと。
- ここに来れば日本国憲法の原本などの象徴的なものを見ることができるといったシンボル展示は必要である。様々な公文書が出されることにより歴史がどのように動き始めたかというような、資料の奥行きをバーチャルリアリティ（VR）やデジタル等によって表現するような展示や、訪れる人に体感的に伝えられるような空間の取り方といった発想も、有効なのではないかと。
- 現在の国立公文書館や公文書管理の制度の枠を超え、より広い視野から公文書管理の意義を理解できるよう、古今東西の広い意味の公文書管理の仕組みについての展示をしてはどうか。

（文書を分かりやすく伝えるための展示の工夫）

- 国立公文書館の所蔵物はやはり紙がメインになってしまうので、例えば、魅力的なキーワードを設定し、それを軸にして国立公文書館の資料以外のものも集めてくるということもあり得るのではないかと。そのためには、企画のやり方をこれまでと変える必要があり、その運用のための仕組みづくりや空間づくりも考える必要がある。
- 例えば「この文書を書いた人達がこういう会議をやって最終的にこういう内容になった」など、象徴的な登場人物を映像や写真、音声などを紹介していくようにすると、非常に具体的なイメージが湧いて良いのではないかと。
- 憲法等の文書について、我々であればその背景のようなものを知っているが、子ども達にとっては、学校の授業で習ったという程度で文書そのものの価値は分からない。その意味では、目玉的な文書の展示についても、文書だけを見て「すごい」と思わせるのは難しいと思うので、その周りに時代的な背景やその文書がどういったことに繋がっていったかといった文脈のようなものも学べるような一種の学習スペースのようなものが、必ず必要である。
- 実際にシンボル展示や常設展示の企画を考えるフェーズになったら、文書をめぐる背景をより面白く見せるような補足の仕方、ある文書を使ってどのような人にどういったことを語れるのか、といったことについては、編集会議などをやって徹底的に考えた方がよいと思う。文書の裏には必ず関わった人

物があるので、背景にある物語をうまく作ると、これまでと全く違う公文書への興味が広がったり、いろいろなことを説明しなくともエッセンスが伝わったりするのではないか。

- おそらく、事前学習用や観覧しながらメモするためのワークシートはずっと使われるツール。展示の中である程度の情報を出しておきつつ、子ども達がそれを見ながら自分達で考えたことなどを持ち帰れるようなものや、先生方が事前に見て子ども達に見どころを教えるためのマニュアルなどの補足プログラムを充実させるとよい。そういったことは後回しにされがちだが、施設のオープンまでにできていると、新たなミュージアムの在り方を提示できるのではないかと思う。
- 今の修学旅行は、かなり事前学習をさせた上でそれを実際に行って確かめるというようなものになっているので、その事前学習のためのページなどを設けて、実際に本物を見てよかったなと子ども達が感じられるようにしていくと、むしろ学校側も飛びついてくるようになると思う。

(原本展示の在り方)

- 特に子どもが国立公文書館を訪れるということを考えた場合、必ずしも予算をかけてまで原本展示にこだわる必要はないのではないか。国立公文書館が原本を持っているという事実は必要だが、結局は直接触れることはできないので、原本とほぼ同じようなものが見られるということでも、十分に納得は得られるのではないか。
- 米国のNARAでは独立宣言などの原本が展示されているが、それはおそらく、あれらの文書に書かれている価値というものがリアルに米国国民の暮らしや存在に関わっていることを実感してもらう、そのためにはやはり現物だということで、原本を置いているのではないかと思う。原本の展示についてはいろいろ考え方があってよいが、原本展示の意味についてはしっかりと確認しておく必要があるのではないかと思う。
- 原本を展示するためにどのくらいの予算をかけてどのくらいの装置を準備するのかについては、もしかすると最初に決めなければならないことなのかもしれない。ずっと展示しておくのか、期間を限定してでよいのか、設計の前どこかで思い切って決めなければならない。
- 原本展示に力を入れればそれだけ原本展示室のメンテナンスにコストがかかってくることになるので、どこまで労力をかけるかについては、運用の持続性と原本展示の意義とのバランスになるのではないか。
- 1人のユーザーとして考えれば、絶対に原本の方がよい。わざわざ人が足を運ぶのにはやはりそれなりの理由があるので、外から見て「あそこにあるんだよ」と言えるかどうかは大きな違いだと思う。どちらにしても1000年や2000年経てば傷んでしまうので、それをどのような時間軸で考えるのかという問

題。

- 例えば正倉院展にしても現物があるから行くので、やはり原本の存在はそれなりに意味がある。

(展示の運用の在り方)

- 実際にはリピーターはごく限られた数であり、ほとんどの人は一生に1回しか足を運ばないということを想定しつつ、企画展示にどれほどのパワーで取り組むかを考える必要がある。企画展示を1年に4回も開催するには大変なパワーが必要であり、そのためのスペースを確保するのであれば、その展示でお金を稼ぐという覚悟で取り組んだ方が良いのではないか。
- 国民の興味を国立公文書館の展示などの活動に向けることが最も大事なことである。マスメディアや SNS を活用した話題づくりの仕掛けにより、「見に行こう」というムードを作ることが必要である。全て国が無料で実施するという在り方では難しいので、入場料を取ってメディアと一緒に事業をやっていくというようなことができるのかどうか。それによって空間の使い方なども変わってくるのではないか。
- 象徴的な文書の展示は国立公文書館の一番大切なところではあるが、我が国の場合、実際のところはなかなか難しい。その点、新たな施設の建設予定地は、国会議事堂、総理官邸、最高裁判所、皇居が見えるという非常にめぐまれた立地であり、その説明の仕方によってはアメリカなどの象徴的な文書に負けなくらいのパンチがある。また、憲法の議論は、国立公文書館の存在価値を国民に理解してもらおう良い機会になるのではないか。

(展示の空間設計に当たっての考え方)

- 展示を考える際に、設計のタイムスパンを考えた方がよい。建物は50年と長期的なスパンのものだが、一方で、展示については見る者も使われるメディアもどんどん変化していくもの。デジタル技術の活用については課題として挙げておいてもよいが、中身について今あまり議論する必要はなく、建物ができる時に改めて考えればよいと思う。
- シンボル展示と常設展示については、空間的につながっているイメージが理想ではないかと思う。シンボル展示の文書はそれほど多くはないと思うが、せっかく見に来て10分で見終わってしまうようでは仕方がないので、来館者の滞在時間を考えると、シンボル展示を見た後に常設展示を見る、というセットを基本型とした方がよい。
- 50年という建築物のスパンを考えると、空間をうまく造っておく必要がある。来館者が持ち込むデジタル機器もどんどん移り変わっていく中、そういった技術と結び付けていかなければならないので、ハードウェアを建築物として造り込んでしまうと絶対に失敗する。むしろ、そういった機器を収容できる

大きな収納スペースのようなものが重要。その時代の最先端のものを入れてしまってもすぐに使えなくなるという失敗例が多いので、設計の段階ではよく考える必要がある。

- ハードを造り込んだり、システムに頼るといようなことは、少なくとも今考える必要はない。大きなシアターやモニターは分かりやすく飛びつきやすいが、どんどん進歩する技術に対応していく予算はない中で、将来的に運用がつかなくなるだけだと思う。
- どのようにすれば小中学生や高校生の理解が深まるかについては、教育の問題でもあるので、展示室のデザインについては教育関係者などを入れて考えていった方がよい。とにかく見た目の造り込みにコストをかけてしまいがちだが、学習的に意味がなければ子どもはそれ以上のってこないの、その後うまくいかなくなってしまう。そうはならないように注意したいところである。
- 今はまだシンボル展示、常設展示、企画展示の考え方を少し曖昧においていいタイミングだと思うので、展示室は、面積を分けずひとまとめにしておいた方がいいのではないかと思う。
- 今の段階では、入口と出口の数や収納スペース、各部屋の収容人数などの方が重要なので、空間の具体的な使い方の例は例として考えておいて、最終的に全体の構造が決まった時にフレキシブルに考えられるようにしておいた方がよい。
- 例えば展示室については、原本を展示できるスペースということがあり、そのためにはそれなりの装置も必要で、配置も地下の方がよいのではないかと。いったことも出てくるので、その辺りも併せて考える必要があるのではないか。スペースだけ確保しておけばいいということになると、いざ中身を造ろうという時に矛盾が出てしまうおそれがある。
- 原本を見せるならば原本展示室が必要であるが、その場合にはその周りを学習の場にするのは無理だと思う。学習の場にはレプリカを置き、原本については別にした方がよいのではないか。

(学習プログラム)

- 小学生に対するアプローチとしては、例えば展示室で自分のお気に入りを見つけるなどの学習プログラムを充実させ、冊子を作って先生方に提示したり、国会議事堂を訪れる前の事前学習に国立公文書館の資料も含めたプログラムを入れるなどのやり方がある。
- 以前の修学旅行は先生に生徒がついて行くだけのものだったが、最近では、事前に調べ学習や課題学習を行うところもある。国立公文書館がその対象になるということも一つの魅力であり、考えてみると良い。
- 国立公文書館のユーザーとしてシニア層が相当数いること、自分達の生きてきた時代を追体験できるという意味で高齢者が国立公文書館に思いを寄せ

る部分が非常に強いことから、シニア層も取り込んだ、より幅の広い社会学習的な学習プログラムについても検討いただきたい。

- 大学生や大学院生が国立公文書館を使用して研究をする素地を形成しておくことは非常に重要であり、大学生・大学院生に向けた専門教育の前のプレ教育のような学習プログラムがあればよいのではないかと思う。
- 国立国会図書館は教育プログラムの開発に力を入れているので、学習プログラムの開発で国立国会図書館と連携して取り組んでいくことも考えられるのではないか。

(施設内見学)

- 修復作業など仕事をしている風景を外から見ることができると、見学コースとしては非常に魅力的なのではないか。

(活動の担い手)

- 内部の人的資源は限られているため、例えば、企画内容に関わる分野の研究者などの外部の専門家を起用してプロデュースしてもらうなどにより、対象者に合わせた広報視点の企画展示などができると良いのではないか。
- 国立公文書館の人材だけで対応することは難しいので、市民や学校の先生などの外部のアイデアをもらって運営していく枠組みをつくってはどうか。外部の人材を取り込む組織を設け、そこで現状の動向を把握したり、それを基にしてテーマを考えたりするような仕組みができるとよいのではないか。
- シニア層などを念頭に、展示の解説や資料整理のボランティアの組織化ということも考えられるのではないか。
- 公文書の歴史的価値は子どもにはわからないので、そのものを見て感激するということはなかなかないが、具体的な場面で背景的なことを説明できる人がいれば全く変わってくるのではないか。大学をリタイアして何か社会に貢献したいという人は多くいると思うので、そうした人たちに参加していただく道があっても良いと思う。
- 歴史を学んでいる大学生などを起用してボランティアのような形でチームで参加してもらうなどということも考えられるのではないか。
- 友の会の会員のような方々などを中心に小中学生などが来た時に説明をってもらう「語り部」などをうまくつくっていけば、その協力を得てかなりのことができるのではないか。
- 展示が新たな施設におけるミッションとして確実にあるのであれば、原本を展示することや様々なコレクションを展示してお客さんに新たな視点を提示していくことも、1つのミッションになる。その際は、所蔵している資料について研究して、さらに物語をつくって展示するための体制が必要になる。広報にも同じことが言えるが、今の体制では絶対に無理なので、新たな施設がで

きる時にはきちんとケアしなければならないと思う。

- 例えば、「私が紹介したい公文書」のようなものを、ボランティアや友の会の会員の方々が選んで展示するようなスペースを設けたり、定常的に参加してもらおうような企画があると、参加してもらおうシステムが構築され、様々なことができるのではないか。

(来館者の動線)

- 例えば団体用の駐車場と団体用の建物の入り口、企画展の入り口の動線確保などは図面を見ながら考えていくといいのではないか。ただし、修学旅行生などが裏口から入るような設計になっているのはあまりよくないと思う。建物全体はメインエントランス、シンボル展示という形で演出され、そこで修学旅行生とシニア世代の人々などが交わる場面が生まれるのも悪くはないと思うので、そういったイメージを共有しつつ設計をしていくといいのではないか。
- 仮にボランティアなどを活動の担い手として活用するとしても、入れる場所と入れない場所の区分けは、責任問題になってしまうので絶対にはっきりさせた方がよい。ただ、今はカードキーで入れる所、入れない所を自由に設定できるので、ボランティアの活動についても決まっていな中、建物の構造として無理に決める必要はないと思う。
- 展示室と研究者が活動する閲覧室等のスペースは、一緒にする必要はなく、はっきり分けてよいと思う。

<2. 広報や相互交流、集客方法等に関する御意見>

(広報の内容やタイミング、ターゲット)

- 新しい国立公文書館は、「国のかたちや国家の記憶を伝え将来につなぐ『場』」として、存在意義を伝える施設としていかなければいけない。
- 多くの人に来てもらいたいということもあるが、国立公文書館の役割と存在意義の発信も重要であり、その両立が難しいところ。多く集客することが国立公文書館の役割ではないのだから、存在意義の打ち出しということについても丁寧に議論していかなければならない。
- ターゲットについては、第1対象、第2対象といったように、情報が伝播していく対象層を作り、情報を持っている人からその他の人へと伝達される設計が必要なのではないかと考える。
- 暮らしてきた世相や時代に応じた世代ごとの切り口というのは有効である。広報するメディアも年代別に対象を切っているのだから、そのような切り口があれば、雑誌やテレビ番組で広報することもできるのではないか。全体の構成とその時々メッセージを込めた展示計画を立てていくと良いと思う。
- 国立公文書館に行くとどのようなものが見られて、どのようなものにアク

セスできるのかということは、大学では全く紹介されていない。ここにはこういう役に立つものがあるのだという情報を大学に入れていくというのは、一つのアイデアだと思う。

- 公文書というものが、例えば歴史、人など、周辺のどのようなことと繋がり得るのか、一度考えてみると良いのではないか。公文書そのものにこだわり過ぎず、例えば文書の修復の仕方を通じてものづくりや手仕事の話を取ったり、保存のテクノロジーの話を取ったりなど、視野を広げて考えてみると、そこに様々な人々を迎える入れるヒントがあるのではないか。
- 国立公文書館がそれ自体の話題性でメディアに載せてもらえる機会はリニューアルの時くらいしかないので、オープンの際にどれだけ盛り上がりをつくれるか、従来の利用者にいかにうまく口コミで仲間を増やしてもらうかがとても重要。この点でニックネームやシンボルマークは非常に重要なので、きちんと戦略や予算を立ててやっていくべき。
- 公文書館の役割の1つは公文書の役割を国民に理解してもらうことであり、その意味で準備広報は非常に重要。県立の博物館では、開館前から県民と意見交換をしながら造っていった例もあるが、そういった形で、開館前から情報発信や相互交流をしていく必要がある。
- 例えば、その時々放映されるドラマを意識した展示テーマを企画する、も国立公文書館の文書が取り上げられる番組があれば積極的に広報に活用するなど、テレビで放映される良質のドキュメンタリーや歴史番組・ドラマと連動した広報・企画ができるとういのではないか。

(周囲とのネットワークを活かした広報戦略)

- 例えば、どのようなワークショップがあるとよいかについて友の会の会員の人達からヒアリングするイベントを開催するなど、せっかくコアなファンがいるので、そういった人々を巻き込みながら、新しい施設に向けたプランを立てていくとういのではないか。
- 設計段階から関わりと非常に愛着が湧くということもあるので、例えば、友の会の人々から「こういう機能があったらいい」というようなご意見を募集するなど、新しい施設をつくっていくところに自分達も参加しているという雰囲気をつくっていけるといいのではないか。
- 企業で、ビルの建て替え自体を一般の人を巻き込んだイベントにしている例があるが、国立公文書館のような公的な施設であればなおさらそうあるべき。市民がプロセスに参加する機会をつくるということは、広報的な意味に加え、国民に説明するという意味でも良いと思う。
- 歴史や政治に興味のある層の人々は、個人で活動している場合もあればグループで活動している場合もあり、同好会などのグループの場合には、アプローチの仕方が少し変わってくるのではないか。これらの人々に活動してもら

い、彼らがグループの数を増やしてくれれば、それが仲間の拡大に繋がるので、その意味で、グループを想定して料金設定や提供するサービスなどを考えることも必要なのではないか。

- 最近の若い人達はウェブも情報が多すぎてあまり見なくなっているので、半年に1回くらい、国立公文書館を紹介する映像を YouTube 等で流すなどの戦略も考える必要があるのではないか。

(集客のための空間づくりの工夫)

- 学校団体の場合は、お弁当を食べる場所を見つけるという問題があり、修学旅行などのツアーコースを決める際にその場所の有無が影響する。専用のオープンスペースを設けるか、他のスペースを開放することができるかという点ではないか。できればそのスペースも魅力的な空間であると良い。
- 大学生や研究者向けに、勉強会や学会の分科会のために貸し出しできるスペースがあると、そのような場を通じた連携ができて良いと思う。
- 女性の来館者を取り込むためには、おしゃれなレストランがあった方が良い。50～60歳代の文化的な活動が好きな女性を想定し、余暇と知的好奇心の両方を満たすことができる場であることが必要であると思う。